教員によるエッセイコーナー

談話室

評伝文化の活性化に向けて

法学部政治学科　教授　井上正也

昨年6月に『評伝福田赳夫』を岩波書店から上梓した。内閣総理大臣を務めた福田赳夫の生涯をまとめた初めての本格評伝である。元番記者、元秘書官、研究者による共同プロジェクトであり、２０１３年から勉強会や関係者へのヒアリングを重ね、完成まで実に足かけ9年を要した。

英語圏においては、大家の歴史家によって政治家の本格的な評伝が書かれることは珍しくない。近年を例にとっても、ニーアル・ファーガソンの『キッシンジャー』や、ジュリアン・ジャクソンの『シャルル・ドゴール伝』といった評伝は、「鈍器」と揶揄されそうな分厚さでありながらも読者を飽きさせない。

これに対して、日本では新書文化の爛熟のせいか、戦後の政治家については、コンパクトな新書や選書での評伝が好まれがちだ。とはいえ、これまで日本で大部の評伝が受け入れられてこなかったわけではない。かつては猪木正道の『評伝吉田茂』のような浩瀚な評伝が刊行されていた。また出来に良し悪しはあるが、有力政治家が亡くなると側近や番記者によって大部の評伝が編まれることも多かった。だが、こうしたプロジェクト型の評伝執筆はコストがかかるためか、１９９０年代に入るとほとんど見られなくなった。

今回のプロジェクトには、こうした時流に逆らって、英語圏に負けない水準で長く読まれる評伝を作りたいという志があった。優れた評伝を書くための最大の課題は一次史料であるが、福田赳夫が書き記した膨大なメモの利用が許されたことによって、実証性も飛躍的に高まった。

共著者のなかで一番若かった私にとって、このプロジェクトは大きな成長の機会となった。もともと私は日本外交史が専門であったが、福田赳夫という政治家の歩みを追体験することを通じて、戦後政治史や財政史の勘所が掴めるようになった気がする。本書の刊行が、浩瀚な政治家評伝が執筆される文化の活性化につながることを願いたい。

2022年５月に高崎市足門町へ移設された福田赳夫胸像と筆者

『評伝福田赳夫』（岩波書店、2021年）